

夢のつぼて

今わたしに
できること

第25回堺市所蔵美術作品展

安井
寿磨子
展

SUMACO
Yasui Etching
Artist



ごあいさつ

堺市では、市民の皆様をはじめ多くの方々に、堺の文化芸術にふれていただくため、毎年「堺市所蔵美術作品展」を開催しています。25回目を迎える本展では、「安井寿磨子展 夢のつぶて ―今わたしにできること」と題し、安井寿磨子の銅版画作品などにみられる独特な世界を紹介します。

安井寿磨子(1959～)は、堺市に生まれ、現在も本市で創作活動続ける銅版画家です。1982年に大阪芸術大学美術学科を卒業後、浪速短期大学(現、大阪芸術大学短期大学部)で山中嘉一(1928～2013、堺で活躍した芸術家)の副手を務めました。1987年に村上龍氏『69 sixty nine』の装画を制作したことをきっかけに、池上永一氏や瀬戸内寂聴氏など著名な作家たちの装画や挿絵などを手掛けるほか、絵本の画を担当するなど、幅広い分野で活躍しています。第一線で活躍する堺の芸術家の一人として堺親善大使も務め、さらに母校の大阪芸術大学で教鞭をとり、後進の育成にも尽力しています。

安井寿磨子の作品は、銅版画特有の繊細で硬質な線と手彩色のパステルの柔らかくて淡い色彩のハーモニーをとおして、木々や花々とともに少女などを描き、独特な世界を表現しています。穏やかさの中にどこか詩的な要素を感じる作風は、絵画作品だけでなく、オブジェや人形など、異なる作品からも感じます。

また、堺に残る日本唯一の自転車の補助輪製造業を営む父とのエピソードを描いた『ほじょりん工場のすまこちゃん』(福音館書店、2022年2月)は、堺での懐かしい思い出だけでなく、工場が並ぶものづくりの町・堺の景観をも振り返ることができる作品です。

本展では、昨年で作家活動 40 年を迎えた安井寿磨子の作風を振り返るため、初期から近年までの作品をとおして、安井寿磨子の“夢(＝世界)”をみていきます。また、『ほじょりん工場のすまこちゃん』の原画も展示することで、作品が完成するまでの過程をみていきます。つぶてのように、一つ一つの作品からあふれる安井寿磨子の世界をお楽しみいただけましたら幸いです。

最後になりましたが、本展を開催するにあたり、多大なご協力を賜りました安井寿磨子氏をはじめ、貴重な作品をご出品くださいましたご所蔵者関係者各位に心より御礼申し上げます。

堺市

「夢のつぶて」

呪文のように展覧会のタイトルをつぶやいているうちに

夢のつぶてという言葉が浮かんだ

つぶては、小石の意味

あるいは、小石を投げること

わたしの版画が小石のように、ポンポンと投げ込まれて

展覧会がかたちになるような

そして、水面に小石を投げたなら

広がって、誰かの波紋になればいい

版画は夢の原石だから

つぶてといえど、なしのつぶて

音沙汰のないこと

投げたつぶては帰ってこず、梨を無しにかけた語呂合わせ

私の作ったつぶては本当に誰かに届くのだろうか

ドキドキしながら震えるような気持ちで作った版画は

不安のつぶてになっていて、

心に重なり積もったものは水面から底に沈んでしまう

夢のつぶては曖昧でつかみどころのない私の心を表しているような言葉だとも思う

けれど、夢が私の作品であるとしたら、それを世の中に小石の様に投げ込んでみる

答えはないけれど、

私の夢のつぶてをあなたに届けたい

安井 寿磨子

目次

ごあいさつ

「夢のつぶて」 安井寿磨子

I 庭 ―四季折々の花と少女

II 詩 ―挿絵と言葉で綴る

III ものづくりの町・堺 ―『ほじょりん工場のすまこちゃん』をとおして

I 庭 ―四季折々の花と少女

安井寿磨子(1959 ～)は、小さい頃から絵を描くことが好きであった。高校では美術部に入り、その後大阪芸術大学美術学科に入学した。3回生の時に版画を選択し、特にエッチングの線に興味をもち、画ではなく、版で表現する銅版画の技法に魅力を感じた。それが、銅版画との出会いであった。

銅版画の制作をとおして様々な書籍や絵本の装画や挿絵を手掛けるなかで、長い間自身が思い描いてきた「庭(=夢)」を詩と版画で表現した詩画集『^{ひれ}^{あと}鱭の痕跡』(インターフォーム、1993年3月)や『柔らかな春の海』(遊タイム出版、2007年5月)にまとめた。これらの作品は、銅版をニードル(鉄筆)で描く銅版画特有の繊細で硬質な線とともに、手彩色(パステル)の淡い色調により、独特な世界観を表している。また、四季折々の花や少女は、自身を投影したモチーフであり、現在も安井の心の中で少しずつ変化し続けている。

本章は、装画や画集の作品をとおして、安井が思い描く情景をみていく。穏やかな中にどこか哀愁たどよう独自の世界をお楽しみください。

[凡例]

- ・本冊子は、第25回堺市所蔵美術作品展「安井寿磨子展 夢のつぶて ―今わたしにできること」[2024年1月20日(土)～2月18日(日)、於：さかい利品の杜]の出展作品を一部掲載したものである。
- ・図版には、作品名、制作年、寸法(cm)、技法・材質、所蔵先を明記した。作品は、全て安井寿磨子氏による。
- ・執筆は、荻山愛華(堺市 文化観光局 文化国際部 文化課 学芸員)が行った。
- ・編集は、堺市 文化観光局 文化国際部 文化課が行った。





1. 願う春の日 2020年 37.0×68.0 エッチング、手彩色・紙 個人蔵



2. 幸福のかげら(村上龍『すべての男は消耗品である。最終巻』装画) 2019年頃 37.5×90.7 エッチング、手彩色・紙 個人蔵



3-1. 春と夏 2019年頃(各) 42.6×90.8 エッチング、手彩色、金箔・紙 風炉先屏風 個人蔵

庭は、安井自身が思い描く世界(夢)であり、四季折々の花や少女などのモチーフにより表現されている。



4. 庭

2013年頃 30.5×30.5×1.0 エッチング、手彩色、金箔・紙、パネル 個人蔵

5. 草に抱かれて 山でも川でもあるところ わたしはどこにも行きません

2013年頃 41.0×41.0×1.0 エッチング、手彩色、金箔・紙、パネル 個人蔵

6. ゼーロンの像 沼の底に似た森にさしかかった ゼーロンにも私にも^{えら}鯛があるらしかった

2013年頃 34.0×34.0×1.0 エッチング、手彩色、金箔・紙、パネル 個人蔵

7. 寄り添う花 花とはな 暑き道にころよせる

2013年頃 39.6×39.6×1.0 エッチング、手彩色、金箔・紙、パネル 個人蔵

8. 残像

2013年頃 31.5×32.0×1.0 エッチング、手彩色、金箔・紙、パネル 個人蔵



3-2. 秋と冬 2019年頃(各) 42.6×90.8 エッチング、手彩色、銀箔・紙 風炉先屏風 個人蔵

安井は、椅子を「人の痕跡(あと)」が最もこるもの」と考え、その人の存在(感)を表す画題の一つとして描いている。

Ⅱ 詩——挿絵と言葉で綴る



10. 心のひだにさわさわと聞こえる 1986年 36.2×56.3 エッチング、手彩色・紙 堺市蔵



9. 吐息の歌 いつもの歌 1987年 52.2×36.0 エッチング、手彩色・紙 堺市蔵



11. コクリコを想う 2011年 53.0×36.5 エッチング、手彩色・紙 堺市蔵



12. 海女美依(アマビエ)珊瑚 2020年 38.0×16.0×5.0 毛糸、パステル、絹など 個人蔵

詩の要素は、安井の作品にとって、版画の世界観を表すために重要なものとなっている。出会った文学作品の内容を綴った言葉からの影響が大きくなる。それらの作品は、詩から版画、版画から詩へと共鳴し合い、作品を観ている私達にどこか懐かしく包み込んでくれる印象を与える。

安井は、現代文学だけでなく、19世紀の世界傑作小説を所収した『諸国物語』(ポプラ社、2008年2月)や、近代を代表する日本の作家51人の傑作短篇をまとめた『百年小説』(ポプラ社、2008年12月)の装画などを担当した。これらの活動は、自身にとって多くの近代文学にふれる機会となり、創作活動を行う上での原動力につながった。さらに『百年文庫』(ポプラ社、2010～11年)では、全100冊の表紙画を木版で制作した。安井は、登場人物や物語の一場面を用い、物語から得た印象を構図にのせて表現している。また、堺出身の歌人・与謝野晶子(1878～1942)が書いた物語や歌をテーマにした作品もあり、様々な文学作品からの影響がみとめられる。

本章は、近代文学作品の装画などを手掛けた作品をはじめ、安井が影響を受けた文学作品のオブジェなどの詩的な作品群をととして、挿絵と言葉で綴られる優しくも穏やかな世界にふれていく。



13. 少年少女(与謝野晶子『少年少女』装画) 2018年 19.6×(全長)60.0 エッチング、手彩色・紙 個人蔵



15. 薔薇と花子(与謝野晶子『薔薇と花子』装画) 2018年 19.8×(全長)60.0 エッチング、手彩色・紙 個人蔵



14. 流されたみどり(与謝野晶子『流されたみどり』装画) 2018年 19.8×(全長)60.0 エッチング、手彩色・紙 個人蔵



16. 諸国物語(『諸国物語』装画) 2008年 37.8×58.5 エッチング、手彩色・紙 個人蔵

作家(物語)との対話は、日本の古典文学から海外の近代文学まで、時代だけでなく国をも越えた幅広い文学作品からも影響を受けている。

これらの作品から得た印象は、安井のなかでゆっくりと時間をかけ、作品へと表現される。



17. 怪(『百年文庫』装画) 2010~11年 48.0×33.2 木版・紙 個人蔵

『百年文庫』(ポプラ社)は、日本だけでなく世界の名立たる作家たちが書いた短篇を漢字一文字のテーマに沿って集めたもの。安井は100冊全ての表紙絵を木版で制作した。

III ものづくりの町・堺 — 『ほじよりん工場のすまこちゃん』をとおして

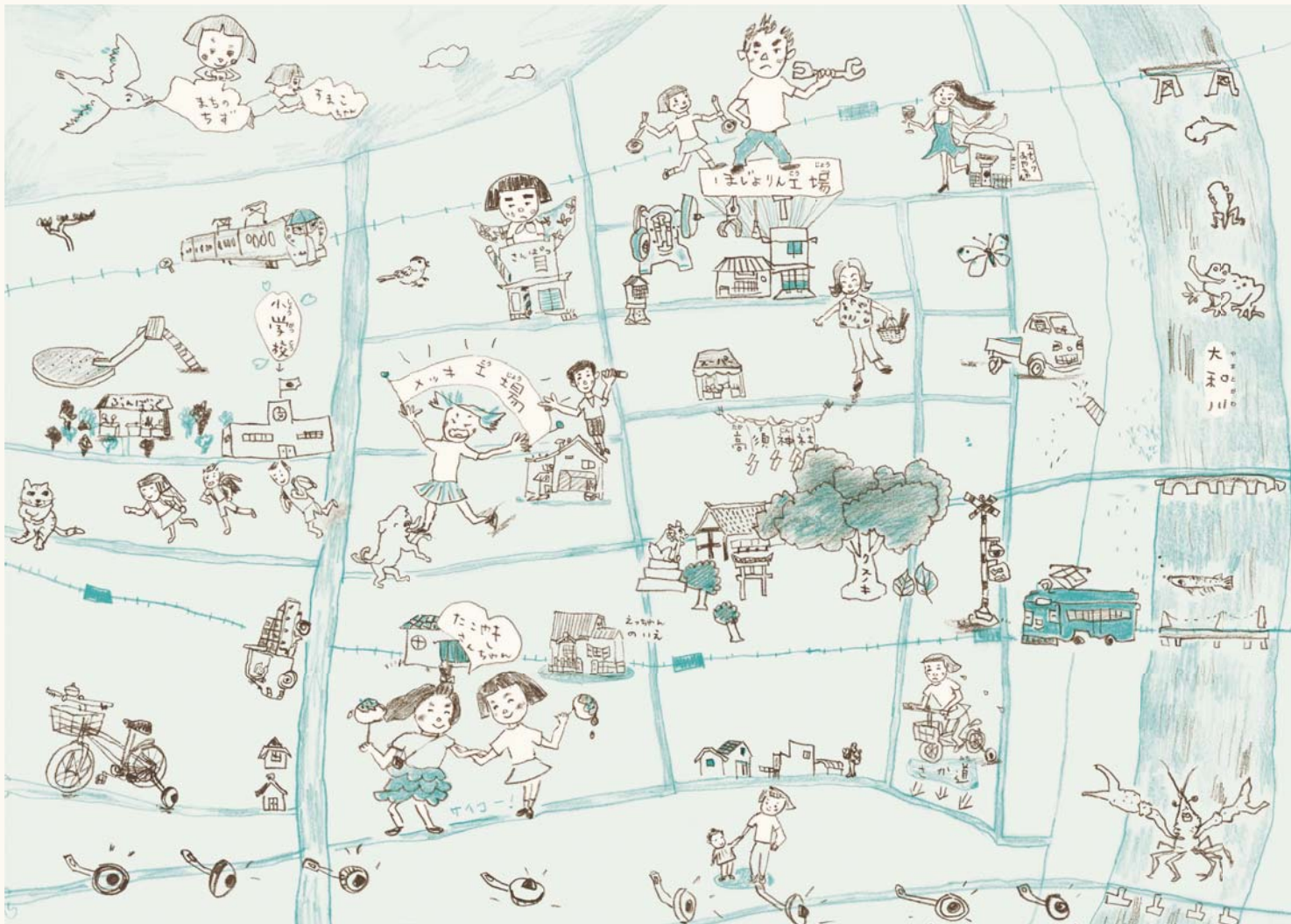
ふるさと堺での思い出は、現在も安井の創作活動に大きな活力を与えている。

『ほじよりん工場のすまこちゃん』(福音館書店、2022年2月)は、2010年に講談社より出版された『こどもほじよりん製作所』を大幅に加筆、修正し、新たにすべての絵を描き下ろしたものである。

物語の舞台は、安井自身の実家である「安井製作所」。当時は日本唯一の子ども用自転車の補助輪製作所として活動していた。自宅周辺には、自転車のサドルやペダル、ハンドルを造る工場が並び、ものづくりの町である堺を表した景観が広がっていた。物語は、あまりやる気のない小学生「すまこちゃん」が、愛用する赤い自転車の補助輪がとれるまでの心温まるエピソードを描く。小学生の頃の体験談をもとにしており、自身が過ごした「ものづくりの町・堺」とともに、当時の記憶を鮮明に描き上げている。安井の作品に共通する独特な世界観の源がある。



18. ほじよりん工場のすまこちゃん 表紙
2022年 38.0×28.0 鉛筆、色鉛筆・紙 個人蔵



まちのちず(『はじよりん工場のすまこちゃん』福音館書店、2022年2月、に所収。)

第25回堺市所蔵美術作品展
「安井寿磨子展 夢のつぶて—今わたしにできること」
会期：2024年1月20日(土)～2月18日(日)
会場：さかい利品の杜 企画展示室
主催：堺市
共催：さかい利品の杜
協力：大阪芸術大学
発行月：2024年1月
編集・発行：堺市 文化観光局 文化国際部 文化課
デザイン：SANTO DESIGN STUDIO
[表紙]安井寿磨子《願う春の日》部分